

よみがえ

甦った太平号

長濱 幸男（宮古島市史編さん委員会副委員長）

太平号の里帰りの経緯

宮古馬保存のきっかけは 1976（昭和 51）年 7 月、琉球大学農学部・新城明久助教授（当時）の「宮古馬の体型と改良の経過」（新城 1976）の発表である。筆者は当時、平良市役所農林課畜産係長をしていたので、6 か市町村と農協、県の出先機関の畜産担当者と構成する「宮古畜産技術員会」に呼びかけて、全島くまなく宮古馬の調査を 1976 年 11 月に実施した。当時、宮古島全島には 2,013 頭の馬が飼育されており、その中から在来馬に近い 21 頭の体型測定と外貌審査を行った。技術員会で審査した結果、宮古馬として純度の高い 14 頭（雄 3 頭、雌 11 頭）を確認した。

1977（昭和 52）年 1 月には、宮古 6 ヲ市町村の経済課長会議で宮古馬の保存対策が検討され、同年 5 月には沖縄県家畜保健所宮古支所が、宮古馬の雄 1 頭、雌 1 頭を導入した。1977 年 11 月、筆者は人事異動で平良市企画室の企画調整官となったことから、連絡調整役の務めとして農林課、商工観光課、教育委員会文化財担当課、企画室で構成する「宮古馬保存対策会」を設置した。

「宮古馬保存対策会」では宮古馬を農家から買い上げて、市熱帯植物園で集団飼育することを申し合わせた。その理由は、次の通りである。「農家での宮古馬の飼育は、たえず使役するため人慣れして良い。また管理面でも十分できる長所を持っている一方、飼育者が高齢化しているため、家畜商に買いとられ島外流出や、老齢馬の肉用としてのと殺がみられる。よって市が宮古馬の集団飼育を行い、島内保留と子馬生産の系統保存をすすめる」。

「対策会」では、宮古馬の保存育成とともに観光資源として活用するため商工観光課に予算化することを申し合わせた。文化財指定については、市熱帯植物園で集団飼育後に取り組むこととした。ところが、予算計上の段階で財政担当課からクレームがついた。買い上げ予定の馬は、在来種ではなく改良馬との掛け合わせで雑種化しているのではないかとの疑問である。この問題を解決してくれた学者は、筆者の琉球大学農学部の恩師・野澤謙教授と高校、大学の先輩にあたる新城明久助教授であった。

野澤教授は家畜育種学の専門で、名古屋大学に勤務していた 1961 年より「日本在来家畜調査団」の一員として全国の在来家畜のみならずマレーシア、台湾、韓国、濟州島、タイ、フィリピンの在来家畜の調査研究を行ってこられた。琉球大学の新城助教授（当時）は 1977（昭和 52）年 11 月、宮古畜産技術員会が調査した宮古馬のうち 9 頭と、宮古雑種馬 287 頭から血液を採取し、血液の分析は野澤教授によって行われた。野澤教授の分析手法は採取した血液試料を血清部分と血球部分に分画くし、電気泳動法という生化学分析にゆだね、血液を構成する各種蛋白の構造を支配する遺伝的変異を検索する手法であった。分析の結果、残された宮古馬は、日本在来馬の一馬種であり保存価値の高い馬であることが立証された。

また、馬の登録をしている日本馬事協会にも問い合わせたところ、「日本在来馬は、それぞれの原産地で生産されたものであって、血統上 3 代前までの間、又は原産地に過去 15 年間にわたり

他の品種が混血していなく、かつ、品種判定委員会において外貌体型上品種の特性をそなえていると認められたものに限り、当該品種とする」との回答を得た。

こうした宮古馬との根拠を明確にして、1978（昭和 53）年 3 月の定例市議会で、宮古馬購入費 200 万円が予算化された。4 月 10 日、宮古馬購入の予備交渉を商工観光課の安谷屋茂公園労政係長と企画室企画調官整官の筆者があたった。飼育農家、平良地区久貝の奥平氏のかぬしゃ号・雌 10 歳鹿毛が 25 万円、城辺地区新城の高原氏のゆかりゃ号・雌 10 歳鹿毛が 23 万円、下地地区上地の砂川氏かりゆしゃ号雌 15 歳鹿毛が 28 万円で交渉が成立した。市熱帯植物園で馬小屋が 4 月 15 日に完成、その日に購入馬 3 頭を引き取った。

雄馬（後に太平号と命名）の情報については、琉球大学の新城先生より伺っていた。糸満市喜屋武集落の農家で飼育されていたが、具志川市（当時）上江洲の陶芸家・名護宏明氏（32 歳）が 1976 年に買い取って飼育しているとのことであった。名護氏に問い合わせたところ、「ただ 1 頭しかない自分の雄馬を宮古島に輸送した場合、事故の危険があり、そうなったら取り返しが付かない。宮古島に里帰りさせることは、絶対考えていない。ここにきて種付けするにしても条件がある。1 頭の雌を送ってもらいたい」とのことであった（76.10.22）。

翌年 1977（昭和 52）年 6 月 1 日、名護氏に電話したところ「自分の持っている馬を、買い取ってほしい」との返事を得た。しかし、繁殖能力については確認がとれていないことや、市では予算化されていないことから回答は控えてきた。宮古馬購入費の予算計上が確実になった 1978（昭和 53）年 3 月 27 日、太平号の繁殖能力の確認のため、筆者は具志川市の名護氏宅を訪ねた。名護氏は「宮古馬の保存に平良市が熱心に取り組んでいると感じている。宮古馬の保存は宮古島で行った方が理想的である。平良市が飼育管理するのであれば、太平号を市に寄贈したい」と申し出があった。

4 月 4 日、宮古馬保存対策会議を開き、名護氏からの宮古馬の雄馬寄贈の申し出を喜んで受け入れることにした。4 月 19 日に「贈呈式・引き取り式」を実施する方向で名護氏と打ち合わせたところ、具志川市長をあっせん役として雄馬を寄贈する段取りであると連絡を受けた。

宮古馬雄の贈呈式は予定通り 1978（昭和 53）年 4 月 19 日に名護氏宅の広場で行われた。地元具志川市からは、飼育者の名護宏明氏とご家族 5 名、当銘由親具志川市長、安慶名正進具志川市議、平瀬則隆平良通り会長らが立ち会った。平良市役所からは前里礼仵課長、安谷屋茂同課公園労政係長、長濱幸男企画調整官が平良重信市長の代理として出席した。進行役は具志川市の栄野川盛次商工課長が務めた。

名護氏は「この馬は家族同様にしてきたが、宮古島に里帰りすることが、この馬にとっては幸せだと思い、平良市に寄贈することにしました」と述べた。当銘市長は「宮古馬は非常に大切なもの。里帰りを喜びたい」とお祝いの言葉を贈ってくれた。

平良市長の代理・前里商工観光課長は「貴重な宮古馬を寄贈していただき感謝申し上げたい。大切に保護していきたい」と述べ、平良市長からの感謝状と記念品のべっ甲を贈った。

寄贈式の後、太平号は 8 トン貨物車で安謝新港へ運ばれ、19 日午後 6 時出港のカーフェリー「玉竜」で宮古島に向かった。受け入れの平良市では、20 日午後 4 時市熱帯植物園で歓迎式を行った。里帰りした雄馬（太平号）は、宮古島内から買い上げた 3 頭の雌馬とともに集団生活を始めた。



左 太平号歓迎式

右から 3 番目 名護宏明

4 番目 当銘由親具志川市長

5 番目 前里礼仞平良市商工観光課長

下左 平良港での歓迎式

下右 市熱帯植物園

池村正義平良市助役



太平号は宮古馬の代表格

太平号という名称は寄贈式の時、名護さんと当銘市長の提案で命名された名前である。宮古島は中国から派遣された冊封使から「太平山」と呼ばれ、宮古船を太平船と称した。琉球王府は、薩摩や江戸に献上した宮古上布を太平布と目録に記している。宮古島から江戸幕府に献上した宮古馬については、「黒粕毛」と記録されているが「太平馬」とは呼ばれていない。太平号という名称は、昭和 10 年に皇太子の乗馬として宮内庁に購入された宮古馬「うるま号」と、大正期に沖縄本島の競馬大会で常に優勝した宮古馬の「ヒコーキ」と並んで、宮古馬を代表するにふさわしい名前である。



太平号の写真



宮古馬の小屋

太平号の体型は、体高が 121 cm、胸囲が 135 cm、斜体長 129 cm、水平体長 123 cm、頭長 50 cm、座骨幅 18 cm、腰角幅 38 cm、尻長 39 cm、胸深 54 cm、胸幅 26 cm、管囲 15 cm である(測定は筆者 1979.10.26)。この体高 121 cm (4 尺) の体型は、江戸時代から明治期の宮古馬より 5 cm ほど小さくなったと考えられる。原因は大正 6~10 年までの間に「馬匹去勢法」が宮古島にも適用されたため、比較的優良な宮古馬の雄が 265 頭も去勢され、その後、小柄な馬同士の掛け合わせで矮小化したものである。遺伝学的には、島嶼化現象と言われている。

太平号の毛色は、宮古島の農家に好まれた黒粕毛の雄馬である。黒粕毛とは、原毛色は明るい赤褐色で白毛が混在し、たてがみと尻尾、そして四肢の下部は黒色である。黒い長毛を除けば、全体の皮毛が人間の若白髪のようにみられる毛色である。大正 9 年、陸軍省馬政局から来島した佐々田伴久技師は「琉球馬の毛色は鹿毛が最も多く、青毛は少なく、栗毛、河原毛、月毛、粕毛などがある。沖縄島尻郡地方は青毛、黒鹿毛など黒系の毛色を嫌う。宮古島地方は粕毛、河原毛を好む傾向にある」と述べている(佐々田 1922)。

毛色についての筆者の調査では、栗粕毛より黒粕毛が農家に好まれた。1710 年琉球中山王が徳川幕府に献上した絵図「中山王使者江戸城への行列図」(国立公文書館所蔵)が残されている。『宮古島在番紀』には、「江戸献上馬を選抜するため琉球王府の高官、別当職の真喜屋親雲上が宮古島に来島した(1713、1746、1838)」と記されているが、上記の「江戸城への行列図」で献上馬を引きつれて登城する琉球王府の高官は、別当真喜屋親雲上で、献上馬は黒粕毛であると記録されている。この黒粕毛の馬は宮古馬の可能性が高い。

市熱帯植物園で集団飼育された太平号と「ゆかりゃ号(12 歳)」が、1979(昭和 54)年 7 月 13 日と 17 日に交配された。翌年の 1980(昭和 55)年 4 月、宮古島の 6 ヲ市町村長で構成する「宮古馬保存会」が設立された。保存会結成後 6 月 20 日、太平号と交配されたゆかりゃ号が待望の子馬を出産した。宮古馬系統馬の生産が完全に途絶えてから 13 年目、純度の高い宮古馬の生産としてはおよそ 30 年ぶりである。宮古馬がごく少数となり、老齢化して最悪の事態におちいていただけに、子孫を残すことは無理ではないかと、なかばあきらめていた矢先のことであった。



生まれた平太号親子



平太号

これで血統保存への貴重な第一歩を踏み出すことができた。子馬の生時体重は 24 kg、与那国馬の 22 kg、トカラ馬の 20 kg よりやや重かった。体高は 79 cm で、与那国馬の 75 cm よりやや高かった。胸囲 64 cm、体長 61 cm であった。額に白斑があれば在来馬として失格であるが、ひたいに白

斑はなかった。毛色は太平号の粕毛の血を受け継いだことを示す粕毛である。子馬は多くの人々からの名称募集により、その中から「平太」という名前が付けられた（長濱 1983）。

太平号の出自と容姿

宮古馬の保護活動が取り組まれてから、特に人気を集めた馬は太平号である。登録されていないため確実な系統は不明である。太平号が宮古島に里帰りしたとき、「我が家で生まれた馬だと思っている」と名乗り出た方がいた。上野地区中山の伊志嶺玄三氏（昭和 8 年生）である。伊志嶺氏の証言は次の通りである。「この馬（太平号）は、体つきがそのままである。特に尻まわり（後軀）に覚えがある。祖父・金徳の手で昭和 11 年生産された。父馬は常雄コーザの子の川満コーザである。母馬はアカンマ（栗毛）であった。5 月以降に生まれたので、アキヤー生まれといった。昭和 34 年頃（孫・沖国大 3 年が生まれたとき）、祖父が城辺地区の家畜商に 20 ドルで売った。24 歳になるまで自分の家で飼っていた。それで良く覚えている」。

太平号はその後、城辺地区から国頭郡の本部町の農家を買われ、その次に糸満市喜屋武部落の農家買い取られ、1976 年に具志川市の名護宏明氏に引き取られた（新城明久談）。伊志嶺玄三氏の証言からすれば、太平号は 1936（昭和 11）年生まれである。亡くなったのは 1983（昭和 58）年 2 月 3 日であることから、 $1983-1936=47$ 歳となる。

太平号が里帰りした段階で、獣医によって馬歯による年齢鑑定をした結果は、30 歳を超えているとの判断であった。筆者も鹿児島大学の西中川駿名誉教授の指導を受けて、太平号の骨格標本の臼歯を測定し年齢鑑定を試みたが、40 歳を超えているとの判断は難しかった。つまり 30 歳以上の高齢馬になれば、歯による年齢鑑定は難しいかも知れない。宮古島平良宮原の下地三郎が飼育していた青毛の雄は 33 歳まで生存した。海外発英国 *Breaking News* によれば 50 歳雌馬の記録もある。



平太号 切歯

中日新聞（2020 年 5 月 11 日）で、木曽馬乗馬センターの寿号雌は 38 歳で健在であることが報道された。昨年 2024 年 10 月 13 日、長野県木曽福島の木曽馬の里・乗馬センターを訪ねた。中川剛場長によると、寿号 40 歳 40 日まで生き延びたとのことである。寿号の遺骨・臼歯が残されていたので、写真を撮って太平号の臼歯と比べると、寿号の臼歯の摩耗度が小さかったように感じられた。つまり、木曽馬の寿号より宮古馬の太平号は長寿馬だと考えられる。臼歯の同定を含め正確な比較鑑定は、今後行う予定であるが、在来馬が 47 歳まで生存することは不可能ではないと考える。



木曽馬 寿号（令和 4 年撮影）

資料 1. 木曽馬の里・乗馬センターの寿号

性別は雌、誕生は 1982 (昭和 57) 年 5 月 10 日、没 2022 (令和 4) 年 6 月 20 日 生存は 40 歳 40 日、体高 124 cm、胸囲 162 cm、管囲 17.5 cm (2005.12.19) 体重 2007 年 342 kg、2015 年 288 kg、2022 年 230 kg
--

木曽馬の里 中川剛提供

太平号の剥製準備

太平号は、市熱帯植物園で子ども達をはじめ観光客に親しまれてきた。ところが、40 歳以上の長寿馬だったため老化が著しくめだち、1982 (昭和 57) 年の夏頃から食欲が衰え、9 月 10 日には 4 回も倒れるなど危険な状態が続いた。獣医は、そう長く生き延びることは困難と診断した。市熱帯植物園の長崎英則係長や飼育係の下地恵慈らは、太平号を長生きさせるため、飼育管理に最善の努力をはらった。

旧平良市では商工観光課が中心となり、企画室、農林課、教育委員会による検討会議を開き、太平号が不幸にして寿命の限界に達したとき、剥製化し永久保存することを決めた (昭和 57 年 11 月 1 日)。そして、太平号を宮古馬保存会に無償譲渡し、保存会とともに剥製化の準備を進めたのである。剥製委託先は、那覇市小禄の九琉剥製研究所 (代表国吉喜一) にすることにした。理由は、国吉氏が天然記念物の「ケラマジカ」や「イリオモテヤマネコ」の剥製標本をつくった実績を持っていること。太平号が亡くなったとき、すぐ対応できること。国吉氏が宮古馬に熱意をよせ、また、木曽馬「第三春山号」の剥製標本にあたった滋賀県長浜市の須川氏とのつながりがあること。宮古馬の関係者がたえず立ち会うことができることなどである (長濱 1983)。

太平号はく製保存基金募集趣意書

1982 (昭和 57) 年 11 月 12 日

宮古馬保存会会長 伊波幸夫 (平良市長)

拝啓 時下ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

宮古馬保存につきましては、かねてから深いご理解と御協力を賜り、衷心から熱くお礼申し上げます。

ご承知のように宮古馬は、過去数百年の長い歳月に亘って宮古島の産業開発の原動力となって経済、文化の発展に大きく寄与し、人々とともに宮古島の歴史を築いてきました。

また、古い時代には、中国や江戸にも献上し、珍重されて宮古島に対する関心をふかめさせ、両国との交流と親睦に貢献しております。このように、宮古馬は私たちの祖先が残してくれた貴重な文化的財産であり、従って宮古馬を保存し、子々孫々に継承していくことは、私たちの務めであると思料するものであります。

このような観点から宮古馬保存会では、宮古馬の種族を絶やさないために、あらゆる角度からその保護対策を講じ、現存する宮古馬の保護管理に最善の努力を傾けるとともに、子馬の生産を推奨しているところであります。しかしながら、殆どの保存馬が高齢化しているために生産が図られず、又、昨年は保存馬が老衰のために相次いで死亡し、保存の前途に暗い影を投げかけている実情であります。

更に追い打ちをかけるように、現在飼養している 10 頭の保存馬の中で最も宮古馬として純度が高く、コーザ馬として、又「平太号」を出産させた種雄馬として多くの人々から親しまれている「太平号」が老衰のために生命が危ぶまれております。宮古馬として価値の高い太平号をこのまま失うことは大きな損失であり、心情的にもしのび難きものがあります。

宮古馬保存会としては、不幸にして太平号が寿命の限界に達した場合、直ちに剥製化し、平良市教育委員会の協力を得て、その原形を長期的に保管し、広く一般に公開して農耕文化と馬の研究、あるいは南島文化の由来と発展を考察する資料として役立てたいと種々の準備を進めております。しかしながら、剥製とその保管維持のために 200 万円の資金が必要であり、財政不如意な保存会ではその資金の捻出は極めて困難となっていますので、皆様方のご厚情にすぎるより外に基金の調達は覚えつきません。

何卒、太平号の剥製保管の意義に深いご理解を賜りまして、御浄財をお寄せ下さいますよう、謹んでお願い申し上げます。敬具

植物園で“お別れ会” 太平号を那覇へ輸送

老齢にともなうはく製保存に備えるため、太平号は 1983（昭和 58）年 1 月 17 日、琉球海運「プリンセスオキナワ」で那覇に輸送された。これに先立って太平号の“お別れ会”が同日午後 3 時半から植物園内でもたれ、関係者 50 名が出席して太平号との別れを惜しみました。

宮古馬保存会会長の伊波市町村会会長に代わり、山里正一同事務局長が「皆様のご協力によって剥製準備が進められており、感謝します。別れは辛いですが命あるうちに剥製業者のもとで看病してもらい、寿命の限界に達したとき、剥製作業が円滑に進むよう今日那覇に送り出します。生まれかわって宮古島に里帰りし、宮古馬の保存と学術資料として役立つことを念じます」と述べました。この後、前里商工観光課長から経過報告、生産者の伊志嶺玄三氏（49 歳）が太平号にまつわる思い出やエピソードなどが披露されました（「広報ひらら」昭和 58 年 2 月号）。



太平号の計測



送り出し会

安楽死による剥製化との誤解

宮古馬保存会では、太平号が死亡してから那覇に送り出すとなると移送、永久保存に耐える剥製化の作業で問題があるとして、1月17日、那覇市小禄の九琉剥製研究所の国吉元に移送し、飼育管理・介護を依頼した。しかし、一般市民からは「剥製化を急ぐあまり、自然死を待たず安楽死させるのではないか」との誤解が生じた。2月2日午後、在沖八重山出身でつくる「がじゅまる会」（松本会長）が那覇市役所に親泊助役を訪ね「剥製の準備が進められているが、馬の気持ちを考えると忍びがたい」と訴えた。同様の助命嘆願は宮古馬保存会にも届けられた。宮古馬保存会と国吉氏は「動物愛護、太平号を思う気持ちはわれわれと同じだ。安楽死させるのではなく寿命の限界に達した後に剥製作業は行う」と理解を求めた。

安楽死説は誤解 宮古馬保存会の見解（1983年2月2日）

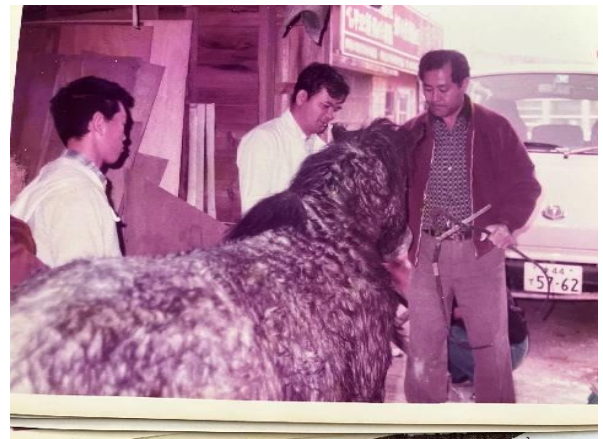
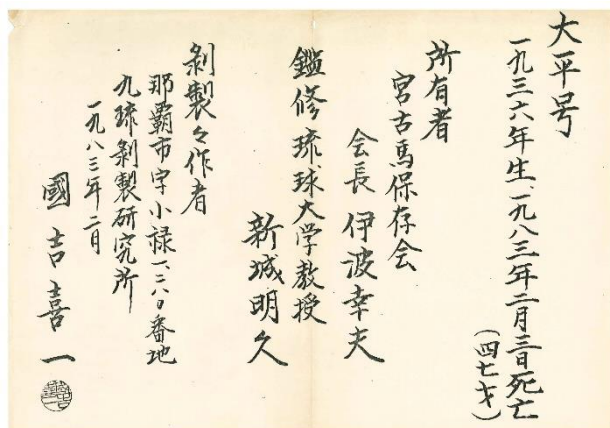
1. 宮古馬保存会も「がじゅまるの会」の御意向と全く同じ考えである。宮古馬太平号が貴重であるだけに、長生きしてほしいと願い、最大の努力をはらってきた。
2. ところが、太平号は老齢化（47才、人間であれば百才以上）、体力のおとろえが著しくめだってきた。青草もかろうじてかむことはできるものの、はき出す状態である。昨年9月19日、20日、27日、10月6日、太平号は倒れて危険な状況になったため、獣医に治療させるとともに、けんめいな看病をしてきた。メニューも食パン、大豆、麦の粉末をつかって流動食に変えてきた。その結果、かろうじて散歩することができた。
3. しかし、小こう状態は保っているものの、天候が悪くなったり、寒くなったりすると太平号のぐ合は悪く、残念ながら獣医の診断したように、そう長く生き延びていくことは困難とみられた。
4. そのため、不幸にして太平号が寿命の限界に達した場合、直ちに剥製化し、その原形を長期的に保管し、学術資料としても宮古馬保存活動のためにも役立てることにした。
5. 死亡してから那覇の剥製業者のもとへ送り出すとなると、移送上の問題、永久保存に耐える剥製化（鮮度を保って剥製化）する問題などがあつたために、那覇に移した。国吉さんも大切に飼育管理することを約束し、実際、宮古島にいたときよりも飼育環境や飼育管理には最善の努力がはらわれている。
6. 安楽死させるとの誤解を招いているが、保存会の方針は太平号が寿命の限界に達した場合に剥製化することである。あと1年も2年も生きるというものを命を絶とうというのではない。
7. したがって、動物愛護、宮古馬を思う気持ちは「がじゅまるの会」の方々と同じである。国吉さんに毎日電話して太平号の健康状態を聞いている。「がじゅまるの会」を始め、多くの県民の方々が、宮古馬の保護育成と太平号が不幸にして亡くなった場合、剥製化による永久保存に御協力下さるようお願い申し上げたい

太平号は極楽往生

太平号は、1983（昭和58）年2月3日、手厚い看護にもかかわらず寿命の限界に達した。国吉

さんから連絡を受け、筆者も急きょ九琉剥製研究所を訪ねた。“血“もあぶらも身体のすべてのエネルギーを使いつくし、天寿を全うしたのである。まさに極楽往生である。袋中寺の住職によりおごそかに供養が行われた。参列者の合掌の後、太平号が生まれ変わるための剥製化を進めることにした。このことは「がじゅまるの会」にも伝えられた。浦崎幹事は「寿命の限界まで飼育してもらって感謝している。会員そろって九琉剥製研究所訪ねたが、太平号は大往生でした」(「琉球新報」1938.2.6)と語っている。それから完成まで1ヵ月、国吉氏の入念な作業が夜遅くまで続いた。国吉氏は「はく製とは、不幸にして生命をおとした動物を生きた形に復元することである」と口ぐせにしていたが、太平号の剥製化にあたっては、誰がみても一見して宮古馬だとわかるよう特徴をだすこと。しかも、老体を「若駒」にすることなど、すこぶる神経を使っている太平号の剥製標本は、国吉氏の入魂の作である(長濱1983)。

国吉氏とともに太平号の剥製標本づくりに貢献した人は、琉球大学の新城博士である。太平号が糸満市の農家で飼われていた頃から、観察を続けてこられた。剥製の骨格ともなる芯づくりや胴体づくりにも加わっている。宮古馬の特徴表現は、新城博士の指導によるものである。剥製標本された太平号の体内には、和紙で記した記録文が保存されている。筆をとったのは、伝統工芸士・沈金士の金城唯喜氏である。



太平号の剥製作業



太平号の剥製標本



太平号の骨格標本

太平号の剥製にあたって特筆すべきことは、約 2 千名の人々から 138 万円の寄付が宮古馬保存会に寄せられたことである。小中高の児童生徒、市町村職員、県、警察、農協、銀行、一般市民、旅行者などである。太平号の輸送にあたっては琉球海運株式会社と有村産業株式会社の両船舶会社が無償で引き受けてくれた。

現在太平号と剥製標本は、宮古島市総合博物館で常設展示されており、参観者に宮古馬の体型や毛色、強固なひづめなどの特徴を伝えている。

資料 2. 太平号剥製化への寄付ご芳名 宮古馬保存会事務局

1.平一小学校	21.平良中学校	41.琉銀宮古支店	61.久米島電報電話局
2.福嶺中学校	22.大和自練	42.長濱清一	62.宮古郡農業共済組合
3.西城中学校	23.北中学校	43.平良次郎	63.牧志電報電話局
4.宮古観光協会	24.福嶺小学校	44.与那嶺測量設計	64.金城丸遺族会
5.久松小学校	25.宮古郵便局	45.自衛隊野原駐屯	65.坂野隆太郎
6.宮古水産高校	26.宮原小学校	46.長間登	66.那覇無線電報局
7.上野小学校	27.砂川小学校	47.宮水太平号同窓	
8.宮古電報電話局	28.宮古教育事務所	48.伊志嶺玄三	寄付金合計
9.台湾農業発展委会	29.西辺小学校	49.南西航空	1,383,960 円
10.宮古支庁	30.鏡原小学校	50.垣花恵栄	団体・個人 66 件
11.宮古農林高校	31.宮島小学校	51.沖銀宮古支店	人数 2 千 15 名
12.北小学校幼稚園	32.平良市議会	52.名護宏明	
13.宮古高校	33.鏡原中学校	53.立津工芸	
14.宮古高校定時制	34.宮古広域組合	54.宮古保健所	
15.バー鍵	35.宮古商工会議所	55.県教員退職会	
16.宮古工業高校	36.池間小学校	56.宮古記者クラブ	
17.宮古汽船 k k	37.平良市役所	57.比嘉トヨ	
18.佐良浜中学校	38.福木の会	58.宮古獣医師会	
19.狩俣中学校	39.沖縄無線中継局	59.平良市教育委員会	
20.宮古警察署	40.宮古畜産技術員会	60.日刊宮古読者多	

関係者出席、引き渡し式（沖縄タイムス）

よみがえった宮古馬「太平号」引き渡し式が 20 日午前、那覇市小禄の九琉剥製で行われ、宮古から伊波幸夫宮古馬保存会会長、森田武雄城辺町長、羽地恵康平良市教育委員会指導課長、山里正一保存会事務局長らが出席した。また以前太平号の所有者だった名護宏明さんも駆けつけ「再生」された宮古馬と対面した。太平号は平良市教育委員会に預けられ、同市の歴史民俗資料館に保管、一般に公開される。

式に先だち太平号の剥製作者の国吉喜一さんは「長持ちさせるためにはホコリにもっと

も気を付けないといけない」と保存について注意した。また剥製作業終了後初めて対面するという名護さんは「体つきが似ている。以前より若返った感じだ」と語った。

この日はあいにくの雨。剥製所横に TENT を張り、太平号の剥製と骨格標本を前にして式典が行われた。制作者の国吉さんは「馬の剥製は初めてでしたが、なんとかやり遂げました」と話した。また、伊波宮古馬保存会会長は「生前そのままの姿で太平号が里帰りできることは宮古の人たちにとっても大変喜ばしい」とお礼を述べた。この後、国吉さんと「再生」に尽力した琉大農学部新城明久教授があいさつした。また、伊波会長から国吉さんら太平号再生に協力した人たちに感謝状が贈られた（「沖縄タイムス」1983 年 3 月 21 日）。

資料 3. 太平号の剥製標本計測値 () は生存時計測値との差

	体高	胸囲	水平体長	頭長	座骨幅	腰角幅	尻長	胸深	管囲
剥 製	122	142	126	55	22	41.5	41	56	18
生存時	121	135	123	50	18	38.0	39	54	15
差	+1	+7	+3	+5	+4	+3.5	+2	+2	+3

生存時の計測 1979 年 10 月 26 日 計測：長濱幸男

剥製の計測 1984 年 11 月 計測：馬事文財団 伊藤正（根岸記念公園年報 7 号）

資料 4. 太平号の骨格標本の計測値（単位：mm）

計測日：2012 年 4 月 27 日 計測者：長濱幸男・砂川史香（与那覇）・上里和彦

頭骨長	A - P	480.00						
下顎骨	Cn-id							
肩胛骨	HS	300.00	DHA	310.00	GLP	86.63	Bd	
上腕骨	GL	255.00	BP	81.37	SD	29.21	Bd	71.52
橈骨	GL	295.00	BP	71.10	SD	32.80	Bd	65.20
中手骨	GL	196.00	BP	47.60	SD	29.27	Bd	43.85
指の基節骨	GL	7.50	BP	52.20	SD	29.40	Bd	43.50
寛骨	GL	364.00						
大腿骨	GL	354.00	BP	86.10	SD	32.40	Bd	85.40
脛骨	GL	307.00	BP	84.14	BM	34.30	Bd	65.20
中手骨	GL	241.50	BP	47.70	SD	27.00	Bd	46.90
足の基節骨	GL	72.40	BP	53.30	SD	27.80	Bd	42.30

GL 最大骨長、BP 近位骨端、BM 骨体中央部、SD 骨体最小部、Bd 遠位骨端

資料 5. 太平号骨格標本 歯の計測値（単位：mm）

計測日：2013 年 6 月 25 日計測者：長濱幸男・上里和彦

上顎骨 右			左	
	冠長 L	幅 B	冠長 L	幅 B
P 2	34.84 mm	23.71 mm	33.98 mm	25.74 mm
P 3	25.51	25.66	24.05	25.06
P 4	24.40	27.94	21.66	18.57
M 1	22.16	26.69	20.95	28.01
M 2	20.48	27.39	19.57	24.28
M 3	31.78	22.15	2.60	20.46
下顎骨 右			左	
	冠長 L	幅 B	冠長 L	幅 B
P 2	30.83	16.84	34.69	18.03
P 3	26.07	19.47	25.73	21.53
P 4	22.33	20.36	24.78	21.83
M 1	21.32	19.51	23.39	21.26
M 2	21.08	15.62	20.17	15.99
M 3	32.08	1.73	34.04	15.20

P 2 は前第二臼歯、P 3 は前第三臼歯、M 1 ～ 3 後第一～三臼歯

注：計測は Driesch の方法によりノギスで行った。

資料 6. 宮古馬保存会発足時の宮古馬の頭数.

所在地	飼 育 者	性別	年齢	毛色	体高	胸囲	管囲
平良市	市熱帯植物園	雄	40 歳	黒粕毛	121 cm	135 cm	15.0 cm
平良市	下地三郎	雄	26	青毛	126	142	17.0
平良市	家畜保健所	雄	10	鹿毛	127	146	16.0
平良市	市熱帯植物園	雌	12	鹿毛	125	160	15.5
平良市	市熱帯植物園	雌	15	鹿毛	126	145	16.0
平良市	市熱帯植物園	雌	10	鹿毛	126	140	16.0
平良市	砂川長吉	雌	20	鹿毛	122	133	15.0
平良市	長浜清一	雌	27	栗毛	128	145	16.0
平良市	家畜保健所	雌	30	赤粕毛	118	144	15.5
平良市	下地金吉	雌	25	赤粕毛	127	158	16.0
平良市	下地恵良	雌	25	鹿毛	125	140	16.0
城辺町	下地隆広	雌	26	栗毛	122	140	15.5
城辺町	川満義雄	雌	17	鹿毛	122	145	15.0
伊良部村	平良恒伝	雌	12	鹿毛	124	147	14.5

(計測は 1978 年 5 月)

太平号の関連記事目録

宮古毎日新聞. 1957 年 11 月 7 日. 「宮古馬は保存すべき 鹿大・琉大共同調査団」

沖縄タイムス. 1976 年 10 月 15 日. 「絶滅寸前の宮古馬 琉大新城助教授保存訴える」

琉球新報. 1976 年 5 月 16 日. 「滅びゆく“宮古馬”」新城琉大助教授調査

沖縄タイムス. 1976 年 10 月 30 日. 「唐獅子 宮古在来馬」長濱幸男

沖縄タイムス. 1976 年 11 月 9 日. 「絶滅寸前の宮古在来馬」名護宏明

宮古毎日. 1976 年 11 月 10 日. 「絶滅寸前の宮古在来馬」(上) 名護宏明

宮古毎日. 1976 年 11 月 11 日. 「絶滅寸前の宮古在来馬」(下) 名護宏明

宮古新報. 1977 年 1 月 2 日. 「宮古馬の生存は 14 頭 関係者が確認調査」

沖縄タイムス. 1977 年 5 月 28 日. 「唐獅子 速歩競馬」長濱幸男

沖縄タイムス. 1977 年 6 月 25 日. 「在来種育成に若い力」

宮古新報. 1977 年 11 月 25 日. 「宮古馬の保護へ 植物園で集中管理」

宮古新報. 1978 年 1 月 1 日. 「宮古馬二世誕生予定 おめでた確認」

沖縄タイムス. 1978 年 3 月 31 日. 「老馬の余生を古里で 平良市受け入れ OK」

宮古新報. 1978 年 4 月 6 日. 「宮古馬保存会結成へ 今年度で 4 頭購入」

宮古毎日新聞. 1978 年 4 月 7 日. 「宮古馬 市が買い上げ保護 植物園に小屋建てて」

沖縄タイムス. 1978 年 4 月 19 日. 名護さんが寄贈 老馬、余生をふる里で」

宮古新報. 1978 年 4 月 20 日. 「宮古馬 きょう里帰り」

宮古毎日新聞. 1978 年 4 月 2 日. 「宮古馬 きょう帰る 植物園で飼育へ」

沖縄タイムス. 1978 年 4 月 22 日. 「太平号 ふ頭で歓迎式 レイを首に里帰り」

宮古毎日新聞. 1978 年 4 月 22 日. 「帰ってきた宮古馬」

広報ぐしかわ. 1978 年 5 月 15 日. 「ふる里に帰る宮古馬 名護さんが平良市に寄贈」

琉球新報. 1978 年 5 月 20 日. 「宮古馬の 3 頭の名前決まる」

沖縄タイムス. 1978 年 5 月 22 日. 太平号の花嫁候補、命名

オキナワグラフ. 1978 年 6 月号. 「太平号が結んだ具志川市と平良市の親善交流」

宮古新報. 1979 年 1 月 30 日. 「来月初旬に宮古馬保存会結成」

宮古毎日新聞. 1979 年 8 月 28 日. 「宮古馬の元祖は中国馬? 日本馬事協会が調査」

宮古新報. 1979 年 8 月 28 日. 「宮古馬のルーツ解明へ 橋口教授が来月調査」

琉球新報. 1979 年 8 月 30 日. 「保存会結成準備会 栗国馬との交配検討」

宮古新報. 1980 年 1 月 10 日. 「与那国馬との統合も 宮古馬保存の方向づけ」

沖縄タイムス. 1980 年 3 月 15 日. 「ゆかりや号おめでた 近く太平号二世誕生」

宮古新報. 1980 年 4 月 19 日. 「宮古馬保存会結成される 放牧場設置」

琉球新報. 1980 年 4 月 22 日. 「宮古馬に二重の喜び 保存会発足と二世誕生予定」

宮古新報. 1980 年 6 月 21 日. 「おめでとう 宮古馬の赤ちゃん誕生」

琉球新報. 1980 年 6 月 25 日. 「すくすく育つ 太平号二世」

宮古新報. 1980 年 7 月 29 日. 「宮古馬保存会 宮古馬どこへ農家に分散依託管理方針」

琉球新報. 1980 年 8 月 1 日. 「宮古馬保存を考える」(上) 長濱幸男

琉球新報. 1980年8月3日. 「宮古馬保存を考える」(中)長濱幸男
琉球新報. 1980年8月5日. 「宮古馬保存を考える」(下)長濱幸男
琉球新報. 1980年9月28日. 「13年ぶりに子馬誕生 飼育者・下地恵慈さん」
宮古新報. 1980年12月6日. 「京都大学の野澤博士 採血など綿密に調査」
日刊宮古. 1982年5月1日. 「宮古馬 絶滅の危機に たった10頭だけ」
日刊宮古. 1982年9月16日. 「栗国島紀行 農業衰退が馬を減らす」謝花勝一
日刊宮古. 1982年10月9日. 「太平号が衰弱で生命の危機」
宮古新報. 1982年10月16日. 「太平号 元飼い主の名護さん見舞う」
日刊宮古. 1982年10月16日. 「前飼い主の名護さん 衰弱を知り急きょ来島」
日刊宮古. 1982年10月16日. 「太平号永久保存(剥製)資金募集」
宮古毎日新聞. 1982年10月16日. 「元気出せ太平号 育て親名護さんが見舞い」
宮古毎日新聞. 1982年10月17日. 「太平号に安楽死宣言？」
日刊宮古. 1982年10月21日. 「飛耳長目」
日刊宮古. 1982年10月22日. 「太平号にカンパ 市内の三兄弟が」
琉球新報. 1982年11月2日. 「落ち穂 コージャー馬」島袋正敏
読売新聞. 1982年12月8日. 「珍種 宮古馬絶滅の危機 わずか10頭、老齢化」
広報ひらら. 1982年11月1日. 「育ての親、名護さん4年ぶりに太平号と対面」
宮古毎日新聞. 1982年12月26日. 「太平号 剥製業者と打合せ」
日刊宮古. 1982年12月28日. 「宮古馬保存会 年明け10日に太平号剥製化」
沖縄タイムス. 1983年1月12日. 「太平号 寄る年波には勝てず 近く剥製に」
宮古毎日新聞. 1983年1月13日. 「宮古馬剥製費用に 与那嶺さん5万円届ける」
宮古毎日新聞. 1983年1月15日. 「さようなら太平号、あさって那覇へ」
日刊宮古. 1983年1月14日. 社説「悔やまれる保護思想の薄さ」
宮古毎日新聞. 1983年1月17日. 「太平号」最後の散歩 今夜、那覇へ」
宮古毎日新聞. 1983年1月18日. 「さようなら太平号 那覇に移送、剥製に」
広報ひらら. 1983年2月1日. 「太平号 植物園でお別れ会」
琉球新報. 1983年2月3日. 「話の卵 いけいけな太平号」
琉球新報. 1983年2月4日. 「投書 太平号に天寿全うを」那覇市40歳学習熟経営
沖縄タイムス. 1983年2月4日. 「太平号起立不能に 自然死も時間の問題」
日刊宮古. 1983年2月5日. 「平太の嫁さんに栗国馬を」
日刊宮古. 1983年2月5日. 「県獣医師会宮古支部 太平号剥製基金に10万円贈る」
琉球新報. 1983年2月6日. 「宮古馬・太平号はく製に」
琉球新報. 1983年2月6日. 「太平号に限りない愛着」石垣義夫
日刊宮古. 1983年2月23日. 「太平号 剥製作業大詰め 新城琉大教授が監修」
日刊宮古. 1983年2月27日. 「飛耳長耳 太平号の剥製」
郵政だより. 1983年2月25日. 「太平号よ永遠に」沖縄宮古郵便局 佐和田弘道
日刊宮古. 1983年2月28日. 「太平号の剥製が完成 市政記念日に披露」

沖縄タイムス. 1983 年 3 月 31 日. 「よみがえった太平号 関係者ら出席 引き渡し式」
広報ひらら. 1983 年 3 月 1 日. 「太平号 はく製にして永久保存」
オキナワ パシフィックプレス 25. 1983 年 4 月. 「太平号剥製で保存永久」長濱幸男
琉球新報. 1983 年 4 月 1 日. 「大役 ご苦労さん 太平号里帰り 多数市民が出迎え」
宮古馬保存会. 1983 年 6 月. 「昭和 57 年度 宮古馬保存事業実施報告書」
日本馬事協会. 1983 年 7 月. 「日本在来馬の保存活用推進のための連絡会議概要」

参考文献

長濱幸男 1983 「宮古の在来馬」『宮古研究第 4 号』宮古郷土史研究会
平良市史編さん委員会編 1981 「宮古島在番記」『平良市史』第三巻 資料編 平良市役所
新城明久 1976 「宮古馬の体型と改良の経過」『日畜会報』47 : 423-429
佐々田伴久 1922 「沖縄県の馬産」『馬政局事業時報』陸軍省馬政局 100-130

